

戦後日本におけるトルコ（タタール）系格闘技選手 に関する覚書

石 井 隆 憲
三 沢 伸 生

I. はじめに

戦後の日本社会においては、しばらくの間GHQの主導の下に、スポーツがコントロールされてきた。剣道や柔道は禁止され、そのいっぽうで学校教育の場においては、積極的にスポーツがおこなわれるようになった。また、戦時下において一時的であるにせよ野球をはじめ様々なスポーツが貼付された「敵性」のラベルが払拭されただけでなく、日本のスポーツ文化が劇的に変化した転換点となっている。

このなかで種々様々な試みがなされ、あるものは成功を取めて今日に至る繁栄の礎を築き、またあるものは短期間に淘汰され歴史から消えていった。近年注目を集める女子プロ野球にしても、1948年にプロ・チームが結成され、1950～51年の2シーズンだけ興行が行われただけで消滅している事例があり、戦後直後の日本のスポーツ文化の層の厚みを物語る。戦後の混乱期を過ぎたころから、プロレスやプロボクシングなどの格闘技系プロスポーツが人気を博すようになり、日本の経済成長とともに大衆娯楽としてのスポーツが台頭することになる。

本稿では、この状況下に戦後日本のスポーツ文化に貢献した外人選手たちの果たした役割を、その一例として、格闘技の世界におけるトルコ（タタール）系選手の存在から再考していくことを試みるものである。

なお関係者の多くが物故した現在、急ぎ生存される関係者から聞き取り調査を行い研究を進める必要があり、本稿はその準備稿にあたる。

II. 戦後日本のスポーツ・芸能界におけるトルコ（タタール）系の存在

戦後日本のスポーツ・芸能界において名声を博したトルコ人およびタタール系トルコ人として、ロイ・ジェームス（1929～1982年）とユセフ・トルコ（1931年～）の名を挙げることができる。

俳優あるいはラジオDJとして活躍したロイ・ジェームスこと本名アブドゥル・ハンナン・サファ（Abdül Hannan Safa）は東京生まれ東京育ちのカザン・タタール系トルコ人である。日本の芸能界における彼の名声とは裏腹に彼の出自はほとんど知られていない。彼の父親アイナン・ムハンマド・サファ（Ainan Muhammad Safa 1898～1984年）はロシア帝国下のベルミ出身で、いわゆる白系ロシア人として日本へ渡り、東京モスク（東京回教寺院）においてイマーム職を務めた経験を有する。戦後、先に芸能界入りしていたE. H. エリック（1929～2000年）の紹介で芸能界入りした彼はおよそ自らの出自を想像させない芸名でもって日本人に外人タレントとして親しまれた。1971年に日本国籍を取得し、1975年には日本人女性と結婚して日本人姓となるものの、1984年に夭逝した際にはイスラーム教徒として東京・多磨墓地のイスラーム教徒墓所において父親の墓の傍らにイスラーム流儀にのっとり土葬された。

今一人が日本プロレス界の草創期から活躍し続けているユセフ・トルコこと、本名ユセフ・オマル（Yusuf Omar）である。彼はロイ・

ジェームスとは異なる道を歩みながら、戦後日本のスポーツ界においてトルコ系・タタール系の格闘技選手たちの中心人物として彼らの存在を束ねてきた。以下、本稿では彼の自伝に含まれる情報を整理しながら、先行研究がほとんど存在しない、トルコ（タタール）系格闘技選手たちが日本のスポーツ文化に果たしてきた貢献を検証する研究の端緒としたい。⁽¹⁾

もとより興行を中心としたメディアの記録こそは断片的に残されてはいるものの、学術的な先行研究は皆無に近く、日本およびトルコの双方において様々な史料の発掘および関係者の聞き取りを、関係者が高齢化している現在、早急に行う必要がある。

Ⅲ. ユセフ・トルコと「トルコ軍団」

ユセフ・トルコはロイ・ジェームスと同じく日本で生まれ育った。ロイ・ジェームスと異なるのは、彼がタタール系トルコ人出自ではなく、オスマン朝の崩壊にともなうトルコ人亡命者の末裔であることである。

彼の父親のケマーレッディン・ユセフオウル (Kemaleddin Yusufoglu, 1903-1964年) は1922年のオスマン朝の崩壊に伴い政治亡命を果たし、最終的に1923年に日本統治下にある樺太島の豊原市 (現: ロシア領サハリン州ユジノサハリンスク Южно-Сахалинск市) に落ち着いた。この地へ到来するまでの父親の経歴などについてはユセフ・トルコの自伝には何も記されていない。本人の弁によれば、1931年5月23日にこの豊原市において一家の次男として生まれ育った。⁽²⁾ ちなみに父親もロイ・ジェームスと同じく東京・多磨墓地のイスラーム教徒墓所に埋葬されている。また自伝に所収される家族写真では、母親や3人の姉妹たちはスカーフを身につけてはいない。

一家は1938年に東京の代々木上原に転居する。1938年といえば、同地に東京モスク (東京回教寺院) が開設された年である。一家の転居にはこの東京モスクに象徴される日本の「回

教」政策が少なからず関わっていたものと判断される。自伝によれば、父親ケマーレッディンは「(トルコ) 民族運動家」であり、同年に横須賀鎮守府司令長官に就いた長谷川清中将 (後に大将, 1883~1970年) をはじめとする陸海軍の高級軍人、中野正剛のような政治家、あるいは右翼の指導者たちと接していたという。現在の管見の限りでは、戦前期の「回教」政策にかかわる書籍・文書類に父親の名前を見出すことは出来ていない。この時期の在日トルコ (タタール) 系イスラーム教徒たちの中には、クルバンガリー派とイスハキー派との反目があり、父親がどのような立場であったのか興味深い。

この転居にともないユセフ・トルコは同年4月に住居に程近い富谷小学校1年生に入学した。この学校において彼は教師から「磯深」という日本人姓を与えられた。戦後においてこの与えられた姓を一切用いず、自己のものとして認識していない。ただこの後もリング・ネームにおいて名前に関わるアイデンティティの問題はユセフ・トルコについてまわることとなる。

この富谷小学校にはトルコ人あるいはタタール系トルコ人子弟が数多く通い、後世に彼のトルコの「トルコ軍団」形成に関わる。さらに後述するように本校の上級生との関わりで彼の格闘技生活が始まることとなる。

1943年にユセフ・トルコ一家8人は長野県軽井沢に疎開となった。この疎開措置は日本政府による強制疎開であった。第二次世界大戦においてトルコ共和国は終戦間際まで日本に対して宣戦布告をせず中立国と立場を堅持していたが、日本政府は1943年にトルコ大使館を軽井沢万平ホテルに疎開させたほか、軽井沢に在日トルコ人を疎開させたのであった。この疎開生活に関して

1945年夏、終戦にともない一家は再び慣れ親しんだ代々木上原に戻った。ユセフ・トルコは横浜山下町にあるフランスのミッション系一貫学校であるセント・ジョセフ・カレッジ (Saint Joseph College, 1901~2000年) の中等部へ進

学する。1949年、十分な英会話力を習得する。高等部への進学を選ばず、仙台の駐日米軍基地に勤務し、ついで神戸の駐日米軍基地へと移った。神戸には戦前期にタタール系イスラーム教徒とインド系イスラーム教徒が協力して設立した神戸モスクがあり、タタール系の共同体も存在していた。神戸における勤務時において氏がタタール系共同体と接触していたのか否かは興味深い点である。

1949年暮頃、東京に帰省したユセフ・トルコは渋谷で富谷小学校時代のとある上級生に邂逅し、「柔拳試合」興行への参加を持ちかけられる。これを転機にユセフ・トルコは格闘技への世界に足を踏み入れたのである。

「柔拳試合」すなわち、柔道とボクシングの異種格闘技興行は、今世紀初頭には日本に粒々にし、大正時代には神戸あたりで盛んに行われていた。⁽³⁾ とりわけ講道館の創始者である嘉納治五郎の甥である嘉納健治が神戸に神戸ジムを開設し、1909年に御影の自宅に「国際柔拳倶楽部」を作り、神戸港の外国人船員たちからボクシング技術を学んだ。やがて1913年にできた劇場である聚楽館において「柔拳試合」が催されるようになった。

このころ戦後日本の大衆娯楽としてプロ柔道をはじめとして様々な格闘技が注目を集めるようになった。「柔拳試合」もその一つであった。

1950年、ユセフ・トルコはトルコ人およびタタール系トルコ人の友人知己5名からなる自称「トルコ軍団」を組織して「柔拳試合」における外人ボクサーとして日本各地での興行に参画する。残念ながらこの軍団の詳細に関しては自伝のなかで詳説されておらず、人間構成や出自や軍団の運営実態などはほとんど不明である。ちなみにロイ・ジェームスの弟もその一員として参画していた。⁽⁴⁾ 彼らは地方興行において興行主の要請により、トルコ人ではなく臨機応変に様々な出身地を名乗る。ユセフ・トルコ自身、いつの間にかアメリカ風に「ダイナマイト・ジョージ」、在日トルコ人である友人Lは「ヘ

ンリー・ジャーニー」というリング・ネームを冠するようになった。同時期の戦後アメリカのプロレス界において某日本人レスラーが「グレート東條」という東條英機を連想させるリング・ネームを用いて悪役レスラーとしての地位を確固としたのと同じく、ナショナリズムに裏打ちされた大衆の鬱憤の解消装置として、トルコ人であることを自称させるのではなく、望まぬままに国籍を詐称させられたのである。ユセフ・トルコ自身、その自伝表題に示されるように日本で生まれ、日本語を操り、日本を愛し、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、格闘技の世界では実生活とは真逆の立場を演じなくてはならなかった。それでも金銭収入的には高給取りであった彼らは課せられた役割をもって格闘技選手生活を継続していく。

1951年、ユセフ・トルコは同じく格闘技の世界にあって前年に相撲を廃業したばかりの力道山との知遇を得る。新たな格闘技を模索していた力道山はこの年にアメリカから進駐軍慰問に訪れたプロレス興行に大いに刺激を受けてプロレスへの転進を決意する。ユセフ・トルコもまたこの力道山に感化を受けて、1952年1月に彼を訪ねて自らもプロレスへと転進を果たした。

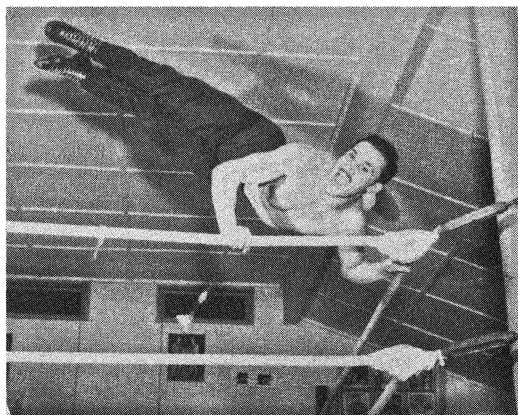


写真1：ユセフ・トルコ（1954年）



写真2：力道山とユセフ・トルコ（1955年）

※2点とも：ユセフ・トルコ『俺は日本人だ！』
東京：ジャパン・プロレスリング・ユニオン、
1982年より。

1954年8月、発足したばかりの日本プロレスのレスラーとなったユセフ・トルコは、「柔拳試合」時代のようにアメリカ人なりフランス人なり出身地を偽称することなくトルコ人レスラーとして参画した。それでも外国人に対する理解の浅いプロレス協会により、登録名が姓名ひっくり返って「ウメル・ユスフ」（加えて原音の「ユセフ」ではなく、本人が違和感を覚える「ユスフ」と翻字された。しかし今日のトルコではローマ字読み「ユスフ」の音写・翻字は必ずしも不適切ではない）、さらに出身地はトルコ共和国イスタンブル、アマチュア・レスリング出身で地中海ミドル級チャンピオンという虚偽の経歴が捏造された。そして同年暮れの大会においてリング・ネームで「ユスフ・トルコ」が用いられ、ある時点で本人の希望が適い原音の「ユセフ・トルコ」となり今日に至る。また悪役レスラーの役割を演じる際には、「キラー・ユセフ」のリング・ネームを用いることもあった。

ユセフ・トルコがプロレスに転進してから、彼のトルコ軍団がどうなったのかは自伝には記されていない。管見の限り、日本のプロレス界においてユセフ・トルコの友人であるヘンリー・ジャーニーが「柔拳試合」時代のリン

グ・ネームのままに1950年代に数試合に出場していたことが確認できるのみである。力道山を中心に急速に整備されていった日本のプロレス界には世界の有名無名レスラーたちが大挙来日するようになり元来格闘技とは無縁であった在日トルコ（タタール）系選手たちへの需要が減っていたのかもしれない。ユセフ・トルコが立ち上げた軍団は解散に至ったのか、あるいは軍団は「柔拳試合」に残り、その衰退と共に姿を消していったのだろうか。自伝によれば軍団の一人であるヘンリー・ジャーニーとはその後親友付き合いであったと記される。

プロレス界に転進してからのユセフ・トルコは、選手や審判、あるいは経営陣の一人としてとしてジャイアント馬場やアントニオ猪木など有名選手とともに日本のプロレスの歴史を担っていくこととなる。

その一方でコメディアン由利徹に弟子入りして映画・テレビで俳優として活躍する一方、自民党の浜田幸一代議士の秘書を一時務めるなど政治家との交友も有するなどしてスポーツ・芸能の世界で成功を収める。⁽⁵⁾

また自伝にはほとんど触れられていないが、ユセフ・トルコは在日トルコ人組織や在日イスラーム教徒組織においても要職をになうなどして、自らの出自に連なるアイデンティティも保持し続けているのも注目に値する。

Ⅳ. おわりに

近年、戦前・戦中期の在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒の存在についての研究に様々な進展が見られる。しかし戦後において彼らが日本社会においてどのような生活を営み、その存在をどのように位置づけていたのかの諸問題に関してはまだまだ研究が進んでいない。

本稿で扱ったユセフ・トルコの自伝はそうした在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒の存在を窺い知る上で極めて興味深い史料である。一般に歴史学において、自伝・評伝は埋もれた史実を含むものとして極めて興味深い史料

である一方、主観的表現や錯誤あるいは意図的操作を含むものとして、そのほかの諸史料によって綿密なる検証作業を経なければならない。

本稿における情報の整理によって、日本のスポーツ文化における在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒の存在の存在に様々な研究課題を見出すことが可能であることが分かった。冒頭に記したように、もとより本稿のような覚書だけでは甚だ不十分であり、整理してきた問題点を起点として、さらなる史料探索・聞き取り調査を行いつつ研究を推進していきたい。

参考文献

- * Ali Merthan DÜNDAR, *Japonya'da Türk İzleri*, Ankara : Vadi, 2008.
 - * 鴨澤巖「在日タタール人についての記録（1） - （2）」『法政大学文学部紀要』28, 1982年, 27-56頁, 29, 1983年, 223-302頁.
 - * 福田義昭「神戸モスク建立前史：昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」『日本・イスラーム関係のデータベース構築：戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』（臼杵陽編, 科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書）2008年, 21-62頁.
 - * 松長昭『在日タタール人』東京：東洋書店, 2009年.
 - * ユセフ・トルコ『俺は日本人だ！』東京：ジャパン・プロレスリング・ユニオン, 1982年.
- ※文中において敬称は省略させていただいております。
- ※本稿は、東洋大学学術推進センター・研究所プロジェクト研究助成金に基づく、研究課題「近代日本におけるトルコ（タタール）系イスラーム教徒にかんする基礎的研究」【拠点：東洋大学アジア文化研究所, 研究代

表者：三沢伸生, 平成20~22年度】の研究成果の一部である。

註

- (1) ユセフ・トルコ『俺は日本人だ！』東京：ジャパン・プロレスリング・ユニオン, 1982年。本書は日本プロレス界草創期の知る上で最重要の史料であると同時に、本人の半生から戦前から戦後にかけての日本におけるトルコ人あるいはタタール系トルコ人の存在を窺い知る重要な史料を提供してくれる。同氏の著作として他に『プロレスへの遺言状』東京：河出書房新社, 2002年あるが、同書は本書と比べて自伝的情報がほとんど含まれていない。
- (2) 一家は三男三女の6人の子供がいた。ユセフによれば、長男オスマン（Osman）、弟アヤズ（Ayaz）は共に教員となったとのことであるが、兄（時に誤って弟と記述されることがあるが兄である）オスマンは「オスマン・ユセフ」の芸名で俳優としてユセフ・オスマンより先に日本の芸能界入りを果たして、映画・テレビで活躍し、1982年に没した。オスマンの芸能活動についてはネット版百科のウィキペディアの当該項目（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%A6%E3%82%BB%E3%83%95>）を参照（2009年10月13日最終アクセス）。なおアヤズは横浜のセント・ジョセフ・カレッジを首席で卒業したとのことである。
- (3) 一例をあげれば、1909年5月に東京の新富座における「柔拳試合」の興行の様子が朝日新聞に報じられている（朝日新聞社編『朝日新聞100年の記事にみる7：スポーツ人物誌』朝日新聞社, 1979年, 59頁）。
- (4) 一説にロイ・ジェームス自身が「ストリート・ロイ」のリング・ネームで「柔拳試合」に参画していたとも言われるが確認には至っ

ていない。

- (5) 映画に関しては、1956年10月公開の『怒れ！力道山』（東映）に本人役で出演したのを皮切りに1977年までに21作品に出演している。出演映画に関しては、「Movie Walker」(<http://movie.walkerplus.com/person/95277/index.html>) を参照（2009年10月13日最終アクセス）。